



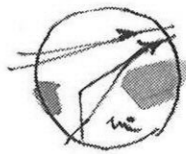
新春



雑感

一写真は宇士の張り子—

松の緑——水野破魔子



長唄の手ほどきをはじめて貰うのは、このごろは童謡などがいろいろあって、お師匠さんが大変合理的に教えて下さる。五つ六つの子が、宵は待ちそしてうらみであかつきの、などと穏やかならぬことを唄わなくてもよいようになってる。

ちくたくちくたく時計屋の親爺が金魚を飼っている丸いガラスの瓶のなか金魚は光って宙に浮くちくたくちくたく午後三時金と銀との時が鳴るこれが長唄の手ほどきのうたとは、昔ものには一寸した驚きである。私が一念発起して三味線を手にしたの

は、はたを越えていたのだから、年は年なり、さなきだに音には鈍なり、鏡花の歌行燈のお三重さんではないが、そしてうらみであかつきの、とまでやっこぎつけると、もう一の糸だか三の糸だか判らなくなるといういたらく。それでも、めりやすのいくつか、それから黒髪と、どうやらあげさせて貰って、松の緑がはじまる。すこし長唄らしくなったその前弾きを、ほんの親指と人さし指との間はずつ行ったり来たりで、どれほどかかったか。それで、ことしより千たびむかふる春ごとに、と唄にはいれた時は、がっくり、やれやれ。

ことしより、ことしより、とやっっている。年が明けてもまたことしより。みんな一せいに笑ったが、多分それは私にあてつけなりなぐさめなりだろうと私も一しよに笑いながら内心おだやかならずひがんだものであった。けれど考えてみれば、不器用の一念にどうでも松の緑をあげようと一心不乱、あらたまの年のはじめに間抜けた声で、ことしより、と唄い初めたそのひとは、その不退転ののぞみを表されてよいひと

でもあろう。さて私自身はいつもいつも、流され流されて一年を過してしまえばかり、ことしよりは、ことしより、と何かを思い立ってみようか。口に出して言えば笑われそうなくつかのねがいのうち、婦人の学習グループの発生からその変化のあととを、克明に記録してみたい、というのぐらいいは、仕事柄おかしくもなく人さまがうけとって下さりはしないだろうか。(熊本市社会教育主事)

マラソンと私——金栗 四三



「近頃の若いもんは……」という言葉に対して、若い世代の人たちは、少なからぬ反撥を感じているようだ。しかし、私は、こんな風に考えてい

る。例えば四〇才の人は、二〇才の人に比べると学歴なり生活環境の違いは別として、少なくとも二〇年間の生活を経てきていることは事実である。二〇年という歳月は、どんな人でも貴重なものであ

り、耳をかたむけるに価する何ものかを持つてはるはずである。つまり、二〇才の人が四〇才の人の言を聞くことは、二〇年間の勉強がいっぺんにできるわけ、賢い若者は、恐らく、この先人の言葉を聞くというやり方を大いにやっているに違いないと思う。何もかも真似する必要はないのであって、良いと思うものだけどんどんもらってしまえばいい。私が走りはじめた五十五、六年前は、それこそ教えてくれる人はなく、自分で失敗してはやり直し、失敗しはやり直しの勉強法だった。今でこそ、酒やタバコは競技にさし障りとして、やめさせるのは、指導者の常識だが、当時はそんなことには一般にとん着なく、私も若さにまかせてよく飲んだ。ところが、酒を飲んだあとは、走っても足が重い、呼吸が苦しい。こうしたことを何回か繰り返してきて、酒は競技に悪い影響があると自分で判った。以来五〇年、酒は完全にやめました。

最近、医者が少量の酒は血液の循環をうながし、老化を防ぐとすすめるので、ブドウ酒半分ほどを水で割って飲んでみた。たしかに体が温まってきて、次第に血行が活潑になるのがよく判る。この体の温まり具合が、ちょうど四〇ほど走った程度の体の温まり、血行の具合とそっくりなのである。居ながらにして、四一、四、五分間走ったと同じ位の生理的効果が得られるとは、これは具合がよろ

しいというわけで、今、時々このブドウ酒を舐めているが、酒は適量ならいいという。しかし、もしこの適量が守れない人なら、むしろ最初からやめた方がいい。良い記録を得ようと思うなら、自分に悪いものと判れば、はっきりと絶ち切る強い意志が必要なのではあるまいか。それと、人間には、何か、目的というか、信念というかそうしたものが必要だと思ふ。私がストックホルムのオリンピックで負けた時、まだ年は若いし、日本という国そのものが世界に伸びていくという意欲に燃えていた時代であっただけに、その負けた口惜しさ、責任感は何ともいえなかった。それ以来、走るためにはどうするか、だけを考えて。食物は悪い影響のあるものは一切捨てた。睡眠を十分にするために映画も犠牲にした。疲れていても走り、真夏も走り、私の生活のすべては、世界を相手に勝負することに集中されたわけである。

マラソンで、日本が世界一になる夢は残念ながら私の代では果せなかった。あの世代の人たちに、その夢は託したい。結局、私がいま、健康なからだであるのは、あの日、ストックホルムで負けたから、ひたすら走るという目的があったからだ、とすら思っている。マラソンに賭けた青春を、決して悔い

遠いあしおと——江藤 和彦



時代の変せんと共に、新春のイメージも大分変わってきた。私は、また異った正月を味ってきたが、それでも戦後からでも非常な変わりようである。私は一時期を除いて、終戦まで北満のチチハルを中心とした地方に住んでいた。故郷を遠く離れた、それも数少ない日本人の間では、矢張り最大の行事としての元旦であった。それはきつと父や母が祖国で体験した、昔の風習の再現であった筈だ。

月が来ると下駄と足袋を買って貰った。それから兄がコマを作ってくれた。それが嬉しくて、新しい下駄とコマを抱いて眠ったという。私達兄弟は笑いころげて父の話聞いた。しかしそれなりに感じとるものがあった。祖父は西南戦争の第一次出兵に従った鹿児島島屯田兵士族であった。その地方ではかなりの百姓であったのにこの程度であったのだ。

見渡す限りの雪原と、興安嶺おろしの寒風にあけられる新春である。同胞愛に結ばれた私達は、誰彼の差別なく新春を祝い、その年の健闘を誓いあったものだ。はては中国人、蒙古人の知己も加わり(彼等は旧正月であるが)いつ果てるともない宴席が続いた。私はこの雰囲気をうかがいながら、父が多分子供のためにそろえてくれた文学全集の類いを読みあさっていた。雪原の向うにツルゲネフの祖国があるのだと、粉雪の舞う夜空を見上げたものだ。四月になると遠い中学の寄宿舎にいかねばならない年であった。

一見幸福そうである。しかし故郷がないのだ。心の故郷喪失である。私の子供にしても下駄を抱いて寝た祖父の嬉しさは理解出来ないだろうし、わが家の自慢料理もない。必然的な社会の流れで生活様式は変っ

た。一見幸福そうである。しかし故郷がないのだ。心の故郷喪失である。私の子供にしても下駄を抱いて寝た祖父の嬉しさは理解出来ないだろうし、わが家の自慢料理もない。

必然的な社会の流れで生活様式は変った。一見幸福そうである。しかし故郷がないのだ。心の故郷喪失である。私の子供にしても下駄を抱いて寝た祖父の嬉しさは理解出来ないだろうし、わが家の自慢料理もない。

必然的な社会の流れで生活様式は変った。一見幸福そうである。しかし故郷がないのだ。心の故郷喪失である。私の子供にしても下駄を抱いて寝た祖父の嬉しさは理解出来ないだろうし、わが家の自慢料理もない。

必然的な社会の流れで生活様式は変った。一見幸福そうである。しかし故郷がないのだ。心の故郷喪失である。私の子供にしても下駄を抱いて寝た祖父の嬉しさは理解出来ないだろうし、わが家の自慢料理もない。